

拾ヶ堰に育まれた緑豊かな新田集落

～先人たちの水を引く努力で誕生した水田と緑に囲まれた暮らし～

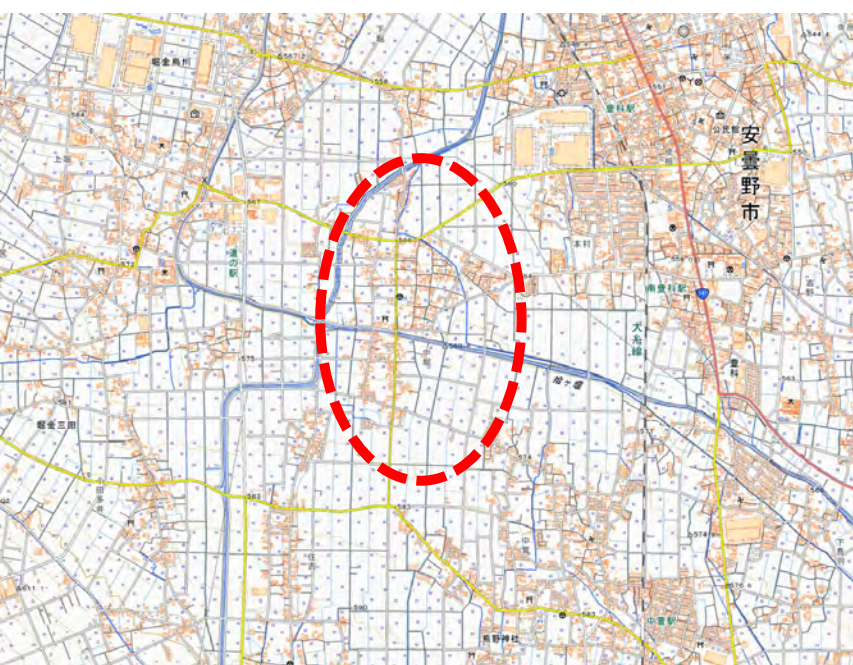
堀金地域の中堀地区は、梓川・烏川・黒沢川等の広大な氾濫原で、複合扇状地の扇中央部にあたり、地表水が乏しく、水田耕作も生活も困難な条件でした。江戸時代になると、水利施設の整備の進行とともに開拓も進み、とくに拾ヶ堰の整備は一帯を不毛の土地から生産と生活の場に変えました。以後、300年以上の間、その恩恵を受けながら緑豊かな新田集落が受け継がれています。加えて、2016年には拾ヶ堰が「世界かんがい施設遺産」に登録されました。



中堀の自然 水鏡

協定団体：中堀地区の歴史を知る会

項目	内容
環境の土台 田園	○梓川・烏川・黒沢川等の広大な氾濫原 ○地下には梓川由来の礫層のある扇中央部分 ○地表水の乏しい土地条件
ストーリーと 構成要素	○原野を切り開いてできた集落 ・江戸初期までは原野(刈敷等の採取場所) ・上流の水路からの分水などにより水田を拡大 ○新たな暮らしを生み出し支えた複数の堰 ・町川堰・勘左衛門堰・拾ヶ堰等、生産と暮らしを支える数々の水の流れ ・拾ヶ堰は2016年に「世界かんがい施設遺産」登録 ・開墾困難な川扇状地扇中央の土地に通水 ・用水を濾して飲む(濾し井戸) ○つくられた農家主体の新たな街 ・開拓で生まれた集落(敷地規模も藩の指示) ・碁盤の目のような道筋 ・農家屋敷・屋敷林 ○暮らしに結び付いた信仰の場 ・中堀神明宮 薬師堂 道祖神 等
産業の関 係・課題等	・米と養蚕が主体 ・時代の進行とともに徐々に農家の兼業化が進行 ・昭和45年以降は農地の構造改善とともに作業の機械化が進行
市民活動の 内容、人材・ つながり	○信州安曇野中堀のあゆみ出版 ○学習会の開催 ○灯籠流しの再現 ○第31回ふるさとウォッチング



西山から眺める中堀地区



拾ヶ堰と常念岳



緑豊かな集落景観



中堀神明宮



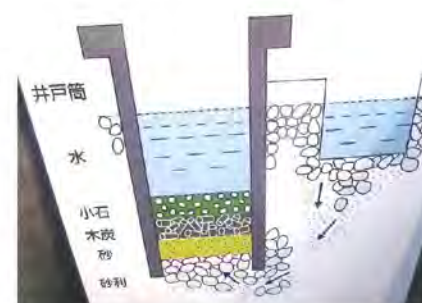
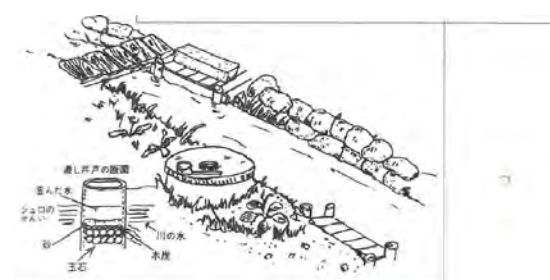
清兵衛木戸の道祖神



薬師堂



伝統的民家と屋敷林



濾し井戸

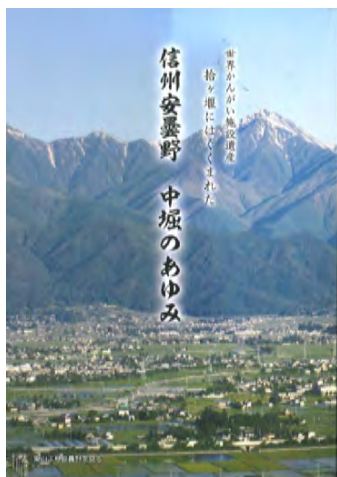


送り盆の伝統行事「灯籠流し」を再現

拾ヶ堰に育まれた緑豊かな新田集落

～先人たちの水を引く努力で誕生した水田と緑に囲まれた暮らし～

構成要素の特色・関連資料

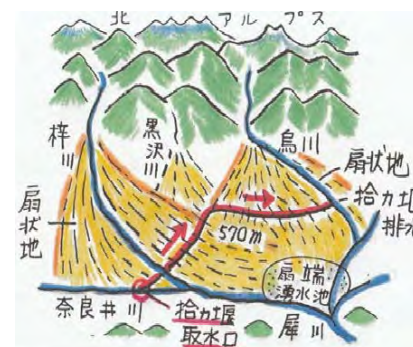


中堀地区の歴史を知る会では、2021年12月に「信州安曇野 中堀のあゆみ」を発刊しました。

本書では中堀の成り立ちやこれまでの経過、暮らしや環境まで幅広く、写真や図もふんだんに用いてまとめられています。

水路や道筋など地域の成り立ちを左右してきた要素に関して本書内の資料と、地図、空中写真等を比較しながら整理しました。

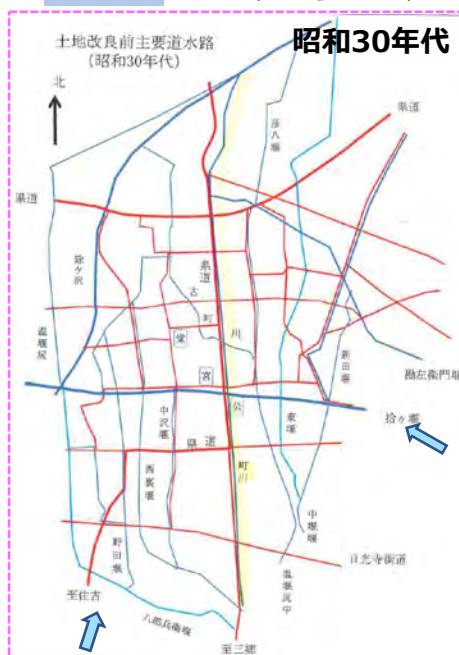
拾ヶ堰



- ・全長約15km、1kmで約30cmほど下がるだけの精密な設計。
- ・奈良井川取水口から烏川放流口までの標高差はわずか5mに過ぎない。

水路

遠くから届く水



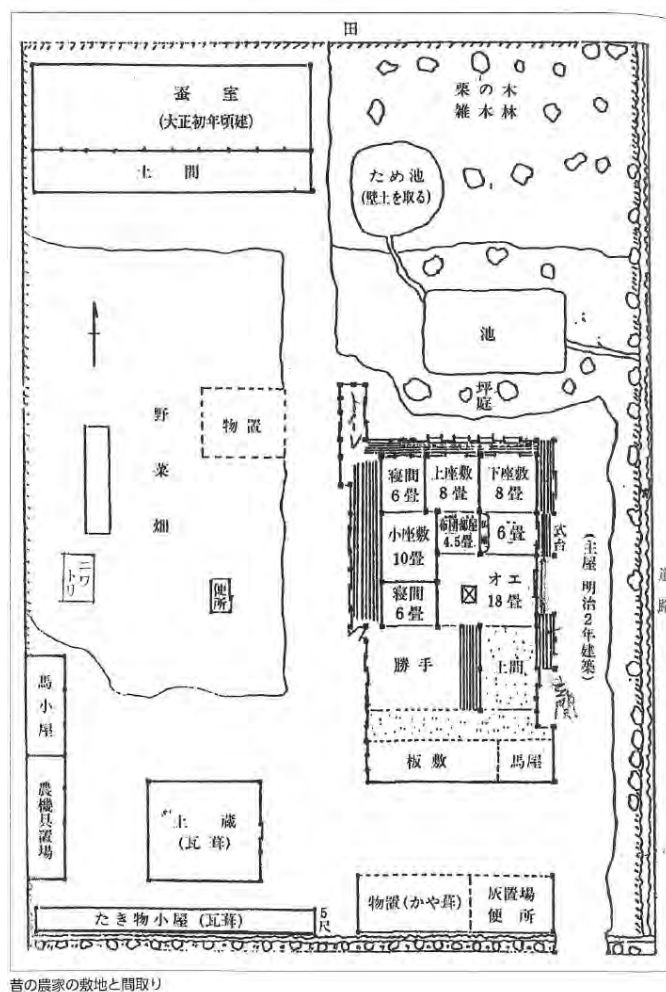
奈良井川から取水する拾ヶ堰の水と、梓川から三郷地域を經由して届く水が、地区の暮らしを支える大事な資源。



農家屋敷

一般的な農家の生活環境

- 屋根・形状
かや麦藁ぶき屋根で、頂上に煙抜きのついた平屋造りが一般的。
- 飲み水
家の横を流れる水路から組んで濾し井戸でろ過してつくっていた。
- トイレ・風呂
上座敷の奥に外便所。風呂は土間の近くで五右衛門風呂が一般的。
- 屋敷林
かや葺の屋根で風に飛ばされないようにするため建物の南北に樹木を植えた。
- 戸数
101戸(明治27年)

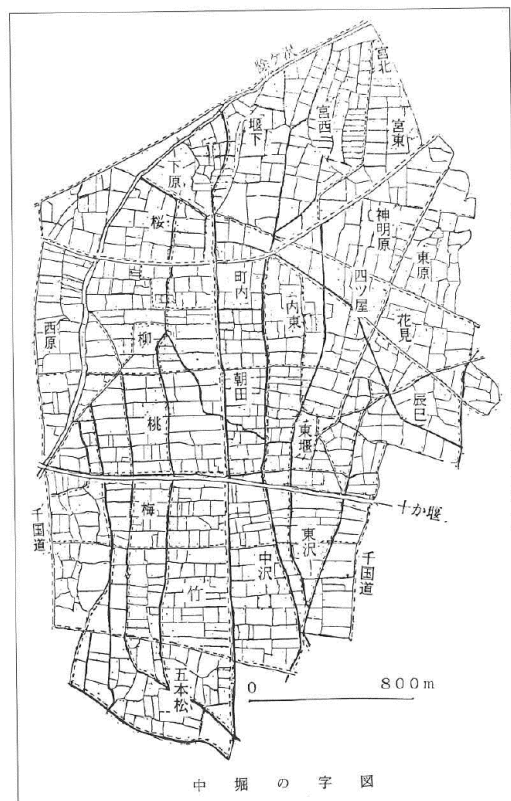


道筋

碁盤の目状の道筋

- ・草刈り場で家や道がなかったところへ開拓者が入植
- ・利用できる土地が限られていた
- ・藩の指示で一区画は15間×60間

等



文化財

住民のよりどころ

祭りの場や記念碑など文化財が豊富。

